



フルーツ×カフェ ～山形トラベルカレンダーを使った 観光サイクルづくり～

山形県立山形東高等学校

佐藤 恭佳 / 三浦 凜愛

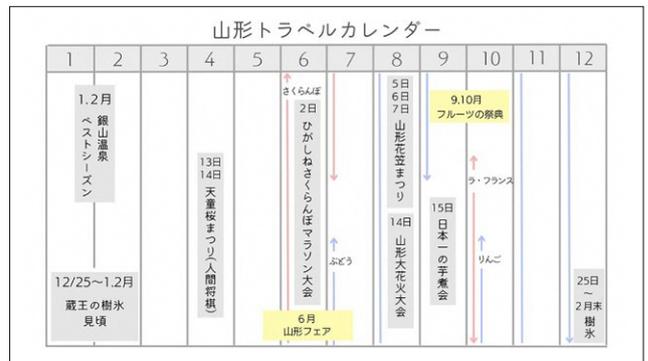
CONTENT 発表内容

山形県は果物王国として、県内外で評価されています。これを観光資源として、県外の人に興味関心を持ってもらうことで山形県の観光客数増加に繋がるのではないかと考えました。

実際に仙台市のカフェで50人に山形県に関するアンケートを実施しました。その結果、50人全員が山形県はさくらんぼの印象が強いと回答しました。また、東根市で作られているベリーを使ったスイーツを食べてもらいました。そしてスイーツを食べる前と食べた後で、山形県に対するイメージの変化を伺ったところ、80%が少し変わった、またはとても変わったと回答しました。どのように変わったかも伺ったところ、「さくらんぼのイメージが強かったけど、ベリーも美味しいんだと初めて知った」「果物が美味しいところなんだということを再確認した」という回答をたくさんいただきました。

これらから山形県に対するイメージがまだまださくらんぼに偏っていることや、他の魅力に気づいていない人がたくさんいることなどがわかりました。

そこで私たちは山形トラベルカレンダーを利用した観光サイクルを提案します。



山形県の時期ごとのおすすめの場所やイベントを記載したトラベルカレンダーを制作し、ウェブサイトやSNSで公開します。また既存のイベントだけでなく、山形フェアやフルーツの祭典といった独自のイベントの開催も考えています。

これはフルーツをバイキング形式で食べられるようにしたものです。加えてスイーツには、農家の方が活用困っているという規格外フルーツを利用しようと考えています。

このように私達が最終的な目標とする観光客の増加に加え、規格外フルーツの有効活用できるこのアイデアを提案します。

COMMENT 審査員コメント



東北芸術工科大学教授 **片岡 英彦**

フルーツ嫌いな人ってほとんどいないじゃないですか。たくさん食べてもらうフェスティバルを活用するのはすごくいいなと思いました。山形が果樹生産150周年を迎えて、来年以降、そういうイベントが県内各地でいろいろ催されると聞いていますので、そういうものと連携して新しいやり方で訴求をしてもらえるといいかなというふうに思いました。



ANA SHONAI BLUE Ambassador **九鬼 江実**

機内でもVTRを使っているんな日本の各地をPRしている動画も配信しています。それを見たお客様やCA自身もこういう場所あるんだと気づいて実際に行ってみようかなと考えたりもするので、とてもよいと思いました。さらに独自のフルーツの祭典についても、山形にはもっと素晴らしいところがたくさんあるんだという熱意をすごく感じられたので、とても素敵な発表だと感じました。

「海ごみ問題を考える ネットワーク作り」の提案

山形県立山形工業高等学校
大津 慶士 / 相澤 一汰 / 阿部 神楽

CONTENT 発表内容

現在、マイクロプラスチックなどの海ゴミが世界的な問題となっており、山形県の庄内浜にとっても深刻な問題になってきています。2014年のデータではありますが、庄内浜で回収されたゴミの量は、4327t、10tトラック約580台という報告があります。

私達は4種類のロボットの開発に取り組んでいます。1つ目は砂浜走行ロボット、2つ目は岩場走行ロボット、3つ目は水面走行ロボット。そして4つ目はダイバーのお手伝いをする水中ドローンです。

海ゴミには3種類あり、その中の漂着ゴミの7割がなんと内陸から廃棄されていると言われていています。海を守るには山形県の母なる川、最上川を守らなければならないのです。それには私達だけの力では何ともなりません。

ものづくりを得意とする県内8つの工業高校がスクラムを組み、河川から海ゴミ問題を考え、行動を実践するという提案をします。最上川源流から日本海までの要所要所に位置する工業高校が中心となり、河川から海を守っていきませんか。さらに工業学科を持つ私学、加茂水産高校、鶴岡高専も加われば、最強スクラムが完成します。

高校生の知恵と行動力で未来を変えられるはず。次のような活動を行いましょう。

庄内浜も こんな状態です



- 1・学校で海ゴミのことをさらに理解する。
- 2・地元の河川に出向き、現状を把握する
- 3・必要なアイテムは自分たちで作る
- 4・近隣小学校で海ゴミ問題の出前授業を行う
- 5・大人向けの啓蒙活動を行う

この活動はSDGsの14番「海の豊かさを守ろう」に繋がっています。

高校生の皆さん、この問題は私達世代が将来直面する深刻な問題です。1人1人ができることをやれば絶対に改善すると信じています。

COMMENT 審査員コメント



株式会社ジョイン専務取締役 武田 靖子

まずは自分たちで作ったこのロボットをどう生かすかということから、このような世界課題と言える海ゴミ、マイクロプラスチックの問題、そしてネットワーク作りということで、もうやれることはやろうという意気込みがものすごく感じられました。単に学びを深めるだけではなく、巻き込み力を使ってこういう体制づくりを行うのは非常に貴重だと思います。



山形県みらい企画創造部長 小中 章雄

最上川は単一の県を流れる川としては最も長く、山形県を象徴する川でありますので、それと庄内浜を関連付けているところが素晴らしいなと思いました。庄内浜を綺麗にして、将来的には飛島でもやっていくということで、できることからやっていくという姿勢がいいなと思いました。



クリームソーダの 屋台カフェを引こう 町子ども会×まちのお年寄り

山形県立致道館高等学校

鎌田 南美

CONTENT 発表内容

あなたは街の人と話していますか。これに自信を持って頷ける人は大変少ないと思います。

これは人同士の繋がりが失われていくということを意味しています。私は、これは今後の山形にとってとても大きな問題なのではないかと考えました。

そこで、『町の子供と町のお年寄りで協力して、クリームソーダの移動式屋台で街を練り歩いてみる』というアイデアを提案します。どうしてクリームソーダか、これは3つ理由があります。1つ目は、時代を超えてみんなが大好きなことです。2つ目は、お年寄りにとっては喫茶店や洋食屋でのご褒美であったこと、3つ目は何よりポップでキュートなことです。クリームソーダは、明治初期に日本に誕生し、愛され続けています。特にお年寄りにとっては、喫茶店やカフェなどでよく親しまれていたかと思います。子供にとってもクリームソーダはとても親しみがあるのではないかと考えました。

町内会の子供と町の高齢者が交流の機会を持ち、まちと人の活気を取り戻そうと考えています。世代を超えた交流によって、心身の健康を促すとともにまちの活性化を図ります。



具体的な実施計画としては、2025年1月に、鶴岡市補助金制度などに応募します。

4月には、町内の工務店さんに手伝ってもらいみんなで一緒に屋台を作ります。7月には回覧板などで再度周知し、8月に実施という流れです。

見たことのない屋台、聞いたことのない繋がり、人同士が話せないことも、お年寄りの閉じこもりもどっかにいってしまう街へ。ぜひ私のアイディアにご賛同ください。確実に実行します。将来の山形の幸せを作るために、よろしくお願いします。

COMMENT 審査員コメント



東北芸術工科大学教授 片岡 英彦

クリームソーダっていうとちょっと懐かしさを感じるので、センスの良さを感じました。そういう思いをすごく大事にしてください。

企画者として先にアイデアや発想から入って、後から実現させるのが醍醐味だったりするので、最後に補助金を要請することまで考えられていたので素晴らしいです。



ANA SHONAI BLUE Ambassador 九鬼 江実

1人でここまで具体的に考えられてるのが本当にすごいなと思いました。実際の生活の中で、世代間の交流がすごく少ないという課題を見つけて、今後何ができるかというところまで考えられているのがすごいなと思いました。ここでまた世代を超えていろんな人を加えていくというところがすごく素敵だなと思って聞かせていただきました。



舟形で耕作放棄地で カリフラワーを作るアイデア ～抗え未来の存続のために～

山形県立新庄北高等学校

伊藤 奏和 / 天口 蒼士

CONTENT 発表内容

皆さんは農業の課題を知っていますか。特に大きな課題となっているのが、人口減少による農業人口の減少です。また農業人口が減少するとともに、耕作放棄地がどんどん増えていっているということがわかります。耕作放棄地のデメリットとしては、害虫の発生、野生動物の侵入、土壌の質の低下、不法投棄の増加などが挙げられます。メリットは全くありません。

そこで私達は、舟形の耕作放棄地でカリフラワーを育てることで、耕作放棄地が減少できるのではないかと考えました。

僕たちがカリフラワーを選んだ理由は3つあります。1つ目は、最上地域の特産野菜にカリフラワーはかぶっていなかったということです。新たな野菜を育てることで注目してもらえようと考えました。2つ目の理由は、舟形の気候がカリフラワーの生産に適していたからです。カリフラワーが多く生産されている新潟県と舟形町の気温、降水量が相似しているため、カリフラワーがよく育ってくれるのではないかと考えました。3つ目の理由は、過去に自分が中学3年生のときに耕作放棄地でブロッコリーを育てた経験があったからです。

結果 実際に自分たちで栽培、加工ができた



ただカリフラワーを育てるだけでは、人気にならないと思います。様々な年齢層に向けて加工してみることにしました。カリフラワーのキッシュ、カリフラワーをほぐしてご飯のようにしたカリフラワーライスを用いたピラフ、カリフラワーのポタージュを試作しましたが、どれもとても美味しかったです。

ですが、生徒2人での加工流通はとても難しいことがわかりました。そこで、僕たちはカリフラワーのブランド化をしようと考えました。そのために、農協や役場との連携を行いたいと考えています。

COMMENT 審査員コメント



株式会社ジョイン専務取締役 武田 靖子

農業でほかにはない強みの特産品を作るとはとても大事なと思います。売り先や料理の仕方など、どう消費されるのかまできちんと考えられていて、頑張っているのが分かりました。料理する側の楽しみを広げることで、農産物を作る人も増えていく形ができればいいのかなというふうに感じました。



山形県みらい企画創造部長 小中 章雄

カリフラワーをライスにしているのでヘルシーな料理として、高齢者の方も楽しめるという点も、ぜひアピールしてほしいと思います。また何時に収穫したら一番いいのが獲れるのかが農作物によって違うと思うので、それを調べて、既存の農家や新たに就業される方が働けるかどうかを確かめるとよいのではないかと思います。



え、非常食がこんなに美味しいの？
山形のうめえもんで
不安を解消！

山形市立商業高等学校

永登 拓海 / 石田 礼恩

CONTENT 発表内容

私達が考案した商品は、もぐもぐレスキュー“袋”です。もぐもぐレスキュー“袋”とは、再利用米袋リュックに県産ドライフルーツなどを詰め合わせた、非常用防災リュックとなっております。お値段は、合計3500円です。

ターゲットは、道の駅に訪れる40から60代の地域外来訪者と、地震や災害への備えを必要としているファミリー層にしたいと思います。

アピールポイントとしては使い終わった米袋を回収しリュックに再利用することで、環境に優しいだけでなく、山形の銘柄米を全国に広められるということを考えました。

私達が考えたプロモーション方法は、1つ目、道の駅で紹介を行うこと。2つ目、県外の小学校で避難訓練でお試し配布を行うということ。3つ目、SNSやポスターなどの広告を作成するという事です。

また、お試し配布を小学校で行うことでファミリー層も認知できるということを考えました。

結論として、私達は、以下の点を挙げました。

特に私達はこの防災バックで備えることで、いつ起こるか

結論

- 不安低減
- おいしいを広められる
- 素材の活用
- 低価格で生産！
- 観光客数UP！
- 道の駅の発展



わからない災害への不安だけでなく、起こってしまった後の不安を解消できるということを考えました。

これからの展望として、私達は実際に商品化したいと考えました。そのためには現在よりも商品ラインナップのバリエーションを増やす必要があります。例として、防災だけでなくアウトドア用や県外のおじいちゃんおばあちゃんへの贈り物や、ふるさと納税などです。

そしてこの活動を通して、SDGsや防災教育へ貢献できたらしいなと考えています。

COMMENT 審査員コメント



東北芸術工科大学教授 片岡 英彦

非常食の提案として最近いろいろ聞いた中では、正直一番面白かったです。こういう商品は差別化が難しい。そんな中で県産のものを使うのであれば、付加価値をつけて高く売ってもいいのかなというのちょっと気になりました。ブランディングとかブランド化っていうんですけど、せっかく県産のものを使うんだったらそういうやり方を考えてもいいのかなというふうに思いました。



ANA SHONAI BLUE Ambassador 九鬼 江実

非常用食を実際に道の駅であまり見ることがないので道の駅に置こうと思ったところが良かったと思います。あと山形県には美味しいものが本当にたくさんあるなって私もこちらに移住してからすごく実感したところなので、それをもっと多くの人に知ってもらいたいっていうところがすごく伝わりました。袋も環境を考えているところもすごくいいなと思いましたので、興味深く聞かせていただきました。



うまいもんプロジェクト

山形県立山形東高等学校 高橋 綾乃
山形県立山形中央高等学校 中川 真凜

CONTENT 発表内容

私達は、山形東高校と中央高校という異なる2校からのチームですが、小学校の6年間を同じ学童で過ごしてきました。そこでの楽しい日々の思い出から、学童をさらに楽しく過ごせる場所にしたい。そして、それを山形の地域活性化に繋がりたいと思い、多世代間の交流の機会の場を作ることを考えました。

このことから私達は学童×郷土料理×地域の高齢者を組み合わせたうまいもんプロジェクトを提案します。

このプロジェクトには、二つの軸があります。1つは高校生による児童へのレクチャーを行います。そこでは高校生が郷土料理のルーツや豆知識などに加え、食事に関連した山形弁を紹介します。そして、このレクチャーの後には郷土料理教室を行います。学童の児童が高齢者に作り方を教わりながら、山形の郷土料理を作り食べます。これによって、郷土料理の作り方を伝承し、児童と地域の高齢者の交流が生まれます。また、料理を作りながら、実際に山形弁を使ってみることが出来ます。



学童をよりよくすることで
山形の魅力をUPさせたい！

さらに展望として、アレルギーに対応したオリジナルレシピを県内の調理科、食物科のある高校と協力して開発すること。そして、子供食堂を利用する子供たちも対象とすることなどを考えています。

このうまいもんプロジェクトは、多世代間の交流の場、山形の食文化の伝承の場となります。

そして、山形の郷土料理や文化が次世代へ受け継がれていくことで、山形の魅力がより広く、そして未来へ発信されることに繋がります。

子供も大人も笑顔にして、山形の良さを広めていきませんか。

COMMENT 審査員コメント



株式会社ジョイン専務取締役 武田 靖子

すごくハイブリッドにいろんな要素を取り入れた取り組みで、考えてる人はすごい楽しいだろうなと思いつつ聞いてました。郷土料理をただ食べるだけじゃなくて作る側になることで、さらに地元のことを知るという点も素晴らしいと思いました。そして高校生が中心になって、子どもたちと高齢者だけで交流が回っているところがまたすごいなと思いました。ぜひこれは実現してもらいたいと思います。



山形県みらい企画創造部長 小中 章雄

学童の子どもと高齢者の方と仲良くなるためには1回だと難しいので、例えばサクランボやサツマイモなど食材を決めて、3回連続でやってみるといいのかなと思いました。このアイデアはかなり素晴らしいな思っています、学校の調理室などを活用して上手くやっているといいのかなと思いました。



シャッター商店街の 生まれ変わりのために・・・

山形県立新庄北高等学校
星 七菜子

CONTENT 発表内容

私はシャッター商店街の生まれ変わりのためのアイデアを考えました。

1つ目は、シャッター商店街にあるお菓子屋さんと9ヶ月間にわたる共同開発を行いました。

そして、信用金庫から資金協力をさせていただき、作り上げたお菓子が「ろーるなっつ」です。これはパッケージも全て高校生が考え、実際に店舗で販売しています。さらにマルシェなどがあった際には、キッチンカーで高校生が実際に販売しております。またふるさと納税の返礼品にもなっています。

2つ目は、新庄市の開府400年にあやかった歴史映画制作をしてみたいというものです。私は新庄市をPRするアンバサダーに就任しました。そして新庄と深く関わりのある直木賞作家の今村翔吾先生と密に連携しながら、現在も映画制作をしています。そして映画を制作するにあたってクラウドファンディングを行い、目標金額を達成しました。

このことから、新庄だけでなく、新庄外のところからも応援してくれる方がたくさんいるということがわかりました。

<アイディア①>



- ★シャッター商店街にあるお菓子屋さん
と共同開発・地域の方からの資金協力
⇒スイーツ完成・キッチンカー販売
- ★ふるさと納税返礼品化決定
- ★全国高校生SBP交流フェアにて全国
銀賞、「輝」賞、審査員特別賞受賞

制作した映画は、商店街近くのホールで来年の夏に上映予定です。そしてYouTubeにもアップすることで山形県全域に新庄の魅力をPRしていきたいと考えています。さらには、英語の字幕をつけたバージョンも公開しグローバル化も図っていきます。

見た目的には何も動いてないシャッター商店街ですが、ビジネス形態を変えることでお金を動かすことができることを実感しました。

これからも人との交流を大切にしていきたいと考えています。にもシャッターを開けるようにしていきたいと考えています。

COMMENT 審査員コメント



東北芸術工科大学教授 片岡 英彦

動画にどうアクセスを集めるかが課題。そのためにはこういう場にご自身が出てきてアピールするのも効果的です。あとはインターネットの検索エンジンでどうやったら上の方の検索結果に上がってくるかをちょっと調べてみるといいかもしれません。あとはSNSで地味に日々のコンテンツを重ねていくなど、動画にたくさんの人に集める工夫を考えてほしいと思いました。



ANA SHONAI BLUE Ambassador 九鬼 江実

スイーツも大好評ということでPR力もかなりあるのかなと思いました。さらに映画についてもロケ地巡礼という形で、遠方から訪れる人が増えると思います。公開後のことも考えられていて、今後がすごく楽しみです。だなどと思いました。



映画都市山形を 音楽で広めよう

山形県立山形東高等学校

秋葉 彩希 / 飯野 ころろ

CONTENT 発表内容

皆さんは、山形県山形市が日本で唯一のユネスコ認定の映画都市であることをご存知でしょうか。

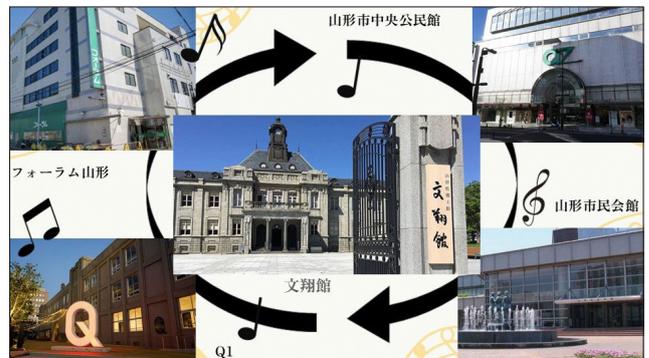
私たちはこの唯一無二の強みを生かして、小さな子供からお年寄りまでが、言葉が通じなくても楽しめる音楽と合わせて、世界に発信するイベント「YAMAGATA MOVIC FES」を考えました。MOVICとは、映画ムービーと音楽ミュージックを組み合わせた造語です。開催時期は、ドキュメンタリー映画祭開催期間の1週間です。

開催場所は映画の上映会場周辺と文翔館です。

映画祭の期間、市内の上映会場の隣接地で山形の伝統音楽を演奏します。映画を見終えた人は、音楽に包まれた山形市を移動して、次の会場へと足を運びます。

そして映画祭のダイジェストや、山形の観光名所をプロジェクトマップとして、文翔館に映し出します。そして、映画祭に訪れた国内外の観光客を山形の小中高生、山形交響楽団とのコラボによる音楽で魅了します。

また、山形市役所前から、歩行者天国にして、山形の食や工芸品をPRします。



例えば秋の風物詩である山形芋煮をはじめとした山形の食の魅力も来場者に知っていただきます。

夏の花笠祭りに次ぐ秋の映画祭を山形に定着させ、冬の蔵王へと繋がります。

これらの企画の効果として、開催から定着までの過程において、山形県の観光コンテンツとして磨かれ、多くの観光客を集められます。

10年20年とときが経つうちに、フランスのカヌ国際映画祭と肩を並べるほど、山形の国際ドキュメンタリー映画祭が世界に向けて発信され、国際色豊かな山形になることを、心から強く願っています。

COMMENT 審査員コメント



株式会社ジョイン専務取締役 武田 靖子

アイデアのスケールの大きさに圧倒されました。ドキュメンタリー映画祭は大事な山形のコンテンツですので、より魅力があって、地域の人を巻き込んで、みんなが主人公になるアイデアだと思います。資金的な問題もあると思いますが、地域住民と観光客の交流などが少なくなってきているので、少しずつ実現に向かっていけばいいと感じました。



山形県みらい企画創造部長 小中 章雄

山形市の魅力を高めてもらえれば、県外から観光に来る人が増えていくのでいいなと思いました。音響がうまくいくのであれば自然の中での演奏も考えられるのかなと思いました、そのときに大蔵村の棚田でオカリナの演奏を行っていたりするので、連携して山形県全体を盛り上げてほしいと思いました。



3・2・1で 有機発信プロジェクト

山形県立高畠高等学校

佐藤 由衣 / 阿部 来良々 / 大熊 梨乎

CONTENT

発表内容

私達は、総合的な探究の時間の中で、高畠の魅力について考え、活動してきました。

東京に研修に行って、高畠町と東京の町並みを比較する中で、畑や田んぼに囲まれた景色が日本のどこでも見ることのできるものではない、価値のあるものだと感じました。

しかし、近年は少子化、町外への若者の流出に伴い、農家の担い手不足が問題となり、耕作放棄地が増える一方となっています。

そんな担い手不足を解決し、地域の景色を守るためのアイデアが、「3・2・1で発信プロジェクト」です。このプロジェクトは、実際に高畠町の農家さんのもとの、日本の高校生、さらには海外の高校生が農業体験を行い、商品開発とその販売を通して、有機農業の魅力を創造発信していくプロジェクトです。

これは農業による生産の1次産業、加工・製造を行う2次産業、販売を行う3次産業を組み合わせた6次産業の形となっています。山形、日本の都心部、台湾のように、違った環境で生まれ育ち、違った価値観を持っている人たちが交わることで、より独創的でユニークな商品を作ることができると考えました。



台湾や都市部の高校生には、季節ごとに4回高畠町に来てもらいます。同時に、月に一度、オンラインで商品開発の打ち合わせを進めていきます。春には、育てる農作物の種まきをし、夏に追肥や雑草除去、秋に収穫をする計画です。さらに、秋から冬にかけて商品の試作を行い、道の駅や東京にある山形県のアンテナショップ、また冬期間に高畠町で開催されているというぼたんまつりなどで直接学生の手から販売を行う計画です。

私達は地元農業の6次産業化を通して、新たに有機農業の魅力を創造発信していきます。

COMMENT

審査員コメント



東北芸術工科大学教授 片岡 英彦

農業の問題は高畠町だけでなく全国で起きています。6次産業化することで付加価値も高くなっていくでしょうし、ビジネスとして携わりたい人が増えていくんじゃないかと思います。そういった点も含めた提案で、とてもよかったと思います。



ANA SHONAI BLUE Ambassador 九鬼 江実

それぞれ育った場所が違うと感じ方も違う。異文化交流することで、それぞれ自分の地元にはこんな魅力があったんだ気づくこともできるので、そういった意見交換はすごくいいなと思いました。その中で企業や農家さんも関わって、世代間でもよりブラッシュアップされていくかと思います。自由な発想を皆さんからいただくことで、より一層さらに良くなっていくように思ったので、すごく素敵だなと思いました。



長期保存に最も適した ドライフルーツの 保存方法とは？

山形県立寒河江高等学校
日野 希寧 / 及川 千尋 / 今野 亜美

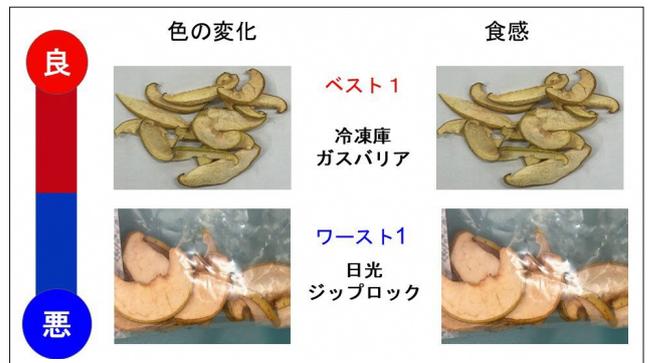
CONTENT 発表内容

私達は長期保存に最も適したドライフルーツの保存方法について探究しました。以前自衛官である父から災害食にもデザートがあればという話をされました。そこで長期保存に適しているであろうドライフルーツに着目し、災害食に生かしたいと思い、果物王国ならではのアイデアを探究しました。

私達が考えたドライフルーツを長期保存させるためのアイデアは、ドライフルーツ保存キットです。キットは空気を通さないガスバリア製の袋の中に乾燥剤が入ったものでできています。その中にドライフルーツを入れ、そのまま日陰・冷凍庫で保存するだけという使い方です。保存キットの利点は、使い方が簡単であること、長期保存できること、災害食として活用できることです。

そこで私達がこの商品のメインターゲットにしたのは、自衛官・被災者の方々です。

災害時は不安やストレスを抱えることが多いと思います。このキットでデザートが食べられるようになれば、自衛官の仕事のモチベが上がり、被災者の方々のストレスを少しでも軽減できるのではないかと考えました。



また私達は60から70代の方々に注目しました。

この年齢は防災意識が高く、また山形は3世代同居率が高いため、親子世代にも広まることです。

災害時、被災者の方々には不安やストレスを抱えていると思います。災害時にデザートがあるというほんの小さなことですが、喜びや幸せを感じてもらえると考えています。加えて、地域課題のフルーツの廃棄を削減でき、これも山形SDGsの観点から見ても、喜びや幸せを感じてもらえると考えています。

このような小さな喜び、幸せが大きな幸せに繋がるのではないのでしょうか。

COMMENT 審査員コメント



株式会社ジョイン専務取締役 武田 靖子

ドライフルーツが災害食だという発想はありませんでした。山形のフルーツを掛け合わせて価値が高まっていけばいいなと思いながら聞いていました。高齢者だけでなく、そのほかの防災意識が低い人たちにどう考えてもらうかが必要だと思います。例えば子どもたちとキットを作って、楽しみながら防災意識を高める流れを作るなど、ターゲットを広げるのもいいなと思いました。



山形県みらい企画創造部長 小中 章雄

山形県は2025年でフルーツ栽培150周年になり、県でもいろいろなPRをしていきたいと考えています。そうした時にこのドライフルーツの取り組みは、苦勞はあると思いますが、先人たちが努力してきたフルーツ栽培に思いを馳せながら頑張ってくださいと思います。



廃木材を再生利用

～SDGsと地域をつなぐ～

山形県立天童高等学校

寒河江 陸空斗 / 庄司 健佑

CONTENT 発表内容

私達のテーマは「廃木材を再生利用、SDGsと地域を繋ぐ」です。きっかけは、下校中に倒木を見つけ、その木をどうにか有効活用し、それと同時に世界共通の目標であるSDGsを広めたいと思ったのがきっかけです。

企画名は、SDGsクラスです。木材の入手方法は、建設現場、リフォーム業者から木材を譲ってもらったり、自分の家から処分する予定の木材を持ってきてもらったりします。その木を利用して特産品の将棋を中心に、アクセサリーやおもちゃを作っていきます。天童市民に親しみのあるイオンモール天童で行います。

SDGsを知ってほしいのは天童市の小・中学生の皆さんです。

手順は

【STEP1】 廃木材をもらい持ってくる、建設現場やリフォーム現場などの協力が必要です。

【STEP2】 木材加工の職人さんに来て教えてもらえます。地元の業者さんに将棋の作り方を教わります。

【STEP3】 SDGsの何に貢献できるのかを知ってもらいます。



この活動でSDGsの、

- 11…住み続けられるまちづくりを
 - 12…つくる責任つかう責任
 - 13…気候変動に具体的な対策を
- に貢献することができます。

この活動が世の中にもたらす効果により、SDGsを考える人数が増え、目標の達成に近づくことができます。また将棋の認知度がアップし、天童の伝統工芸を後世に残すことに繋がります。

COMMENT 審査員コメント



東北芸術工科大学教授 片岡 英彦

一番すごいと思ったのは、通学の倒れた木を見てもったいないと思うところから始めて、それを将棋の駒にしたらどうかという関連性やつながりが面白かったです。一点だけ何かアドバイスができるそしたら、廃材だからこそできるという商品の付加価値をつけるような廃材の使い方が加わるとさらに良い取り組みになると思います。



ANA SHONAI BLUE Ambassador 九鬼 江実

SDGsを考えて、小中学生の子たちにちゃんと理解してほしいという熱意が、とても伝わりました。将棋の駒から派生して、更に色んなものができるのではと、すごく楽しみな気持ちで聞いておりました。ありがとうございました。